

『後拾遺和歌集』 和泉式部「物思へば」歌と貴船の神詠

岡 おか  
田 だ  
ひろみ

一

和泉式部の「物思へば」歌は、現存する数多くの彼女の和歌の中でも人口に膾炙した歌のひとつである。

男に忘られて侍りける頃、貴船に参りて、御手洗川みたらしがわに蛍の飛び侍りけるを見てよめる

和泉式部

物思へば沢の蛍をわが身よりあくがれにけるたまかとぞ見る

御返し

奥山にたぎりておつる滝つ瀬にたまちるばかり物な思ひそ

この歌は貴船の明神の御返しなり。男の声にて和泉式部が耳に聞えけるとなんいひ伝へたる

(『後拾遺和歌集』卷二十・雑六・神祇・1162・1163)

『後拾遺和歌集』（以下、後拾遺集と略す）雑六・神祇に収載されるこの歌は、貴船明神との贈答としておかれている。和泉式部の私家集である『正集』『統集』には見えず<sup>①</sup>、『後拾遺集』が、はじめてこの歌を歌集に収めた和歌集であった。これ以降、『俊頼髓脳』『無名草子』『古今著聞集』など、中古・中世の歌論、評論、説話集など多くの作品にとられてゆき、「和泉式部の伝承」のひとつとして人々の関心を集めたことがうかがえる<sup>②</sup>。和泉式部の歌に貴船明神が感応するというやりとりが、神仏靈験譚として興味をひいたことは想像にかたくない。また、和泉式部を忘れた（捨てた）「男」は誰なのか、ということも、恋多き女であったがゆえに人々の関心を集めたのであろう。後世の説話では「男」ではなく「保昌」をあてるものも多いが、真偽はさだかではない。そもそも和泉式部集には所収されておらず、「物思へば」歌自体が和泉式部の作であるかどうかという疑いも残る。だが、何より「和泉式部」の歌として、勅撰集に入集していること、いかにも「和泉式部」らしい和歌として時代を超えて様々な人々、作品に享受されてきたことを重視したい。

和泉式部の「物思へば」歌については、近年、古代から平安朝の遊離魂、「あくがる」「蛭（歌）」の表現史から、和泉式部の当該歌の特異性を指摘するなど、多数の先学の論考がある<sup>③</sup>。一方で、貴船明神の歌については、あまり追究されてこなかった。また、和泉式部の貴船参詣の理由について、諸注諸論考では、「今一度、恋人の心が戻ることを祈るため」<sup>④</sup>、「ひどく思い悩んでいますと神に訴えた歌」<sup>⑤</sup>、「恋を失った憂悶の身を貴船明神の前に運び鎮魂の祈願を込めた」<sup>⑥</sup>など様々である。何のために参詣したのか、詞書に明示されていないからこそ、様々に想像できるともいえるが、数々ある寺社の中でも「貴船」を選んだのはなぜなのだろうか。

そこで、本稿では、なぜ「貴船」なのかという事を起点に、『後拾遺集』雑六・神祇におかれた和泉式部と貴船明神とのやりとりを読み直してみたい。

## 二

平安時代、「貴船」は、どのような神であったのか、当時の人々にどのようにとらえられていたのか。和泉式部の生きた時代の前後、『後拾遺集』編纂あたりまでを視野にいれて確認しておく。

貴船神社は、現在の京都市左京区鞍馬貴船町にある。史料上の初出は『日本紀略』で、「山城國愛宕郡貴布禰神為大社」（弘仁九（818）

年五月八日条」とある。『延喜式』卷九〈神名上〉山城国愛宕郡条に、「貴布禰神社」とあり、十世紀半ばには、有事や祈雨・止雨などで重視され固定されつつあった二十一社（伊勢・石清水・賀茂・松尾・平野・稻荷・春日・大原野・大神・石上・大和・広瀬・龍田・住吉・丹生・貴布禰・吉田・広田・北野・梅宮・祇園）に入っていた。<sup>7</sup>「貴舟」「木船」とも書くが、本稿での表記は、現在通行する社名である「貴船」に統一しておく。賀茂川上流の貴船川のそばに鎮座し、早くから水神として祀られていたと思われ、平安遷都後、祈雨祈晴の靈験ある神として重視されるに至ったようである。例えば、『権記』には、「依霖雨（長雨）并可被奉赤馬於丹生貴布禰事」（長保二（1000）年八月十八日条）といった、長雨を止めるべく止雨祈願を「丹生（大和国丹生川上神社）」と「貴布禰」で行ったという記事がみえる。祭神は闇寵神（竜神）、高寵神である（岡象女神「二十二社註式」とも伝える）。

当時の貴族女性は基本的に邸宅内で過ごす、祭見物や寺社参詣などが数少ない外出の機会であったため、女性による寺社参詣の記事自体は、日記や物語に散見される。例えば、奈良の長谷寺参詣などは、観音信仰もあつて『源氏物語』『更級日記』など多くの作品に記されているし、京都近郊でも、清水寺は『枕草子』『落窪物語』『源氏物語』などに、石山寺は『蜻蛉日記』や『和泉式部日記』『源氏物語』などに登場し、女性たちが参詣している。神社であれば、賀茂はもちろんのこと、石清水や住吉社などはたびたび登場する。しかし、貴船神社（貴船の神）は出てこない。<sup>8</sup>山城国内とはいえ、鞍馬山ふもとの山奥で薄暗い立地という地理的な理由もあるかもしれないが、女流日記や王朝物語類には登場しないのは興味深い。

平安時代中期の仮名散文作品で、貴船の神が唯一登場するのが、『栄花物語』である。『栄花物語』の「栄花」とは、藤原道長とその一族の栄花であり、正編の作者は、赤染衛門、また彼女を含め道長一族に仕えた女房集団と考えられている。周知の通り、和泉式部も道長（彰子）に仕えた女房の一人だったわけだが、『栄花物語』の中で、貴船の神が登場する全ての場面は、道長一族（道長、頼通、教通、彰子）及び彰子の子後一条天皇と関わる文脈にある。和泉式部が生きた時代の貴船の神の姿が窺えるため、やや冗漫になるが、三場面（全四例）すべて確認しておきたい。そこには、祈雨祈晴と全く関わらない貴船の神の姿が記されている。

まず、巻十二「たまのむらぎく」を引く。頼通への女二の宮（三条天皇皇女禊子内親王）降嫁が決まり、準備がすすむ中、頼通は原因不明の病で倒れ、加持祈祷の効果もなく、日々病状は重くなっていった。

## 【場面①】

かくて一七日過ぎぬ。いま七日延べさせたまへるに、こたびぞいとけ恐ろしげなる声したる物の怪け出で来たる。これぞこの日ごろ（頼通を）悩ましたてまつりつる物の怪なめりとして、鳴りかかりて加持ののしりて、かり移したるけはひ、いとうたてあり。いかにいかにと思すほどに、はや貴船の現れたまへるなりけり。「こはなどかかるべき。この殿（頼通は）あだなるわざせさせたまふこともなかりけり」とよく尋ねれば、この内裏うちわたりより聞ゆること（女二の宮降嫁）により、この上（頼通室隆姫）の御乳母めのおとな【ど】の、祈りを申させたるほどに、おのづから神の御心はかくわづらはしきこえたまふなりけり。（卷十二・たまのむらぎく②六十頁）

ようやく祈禱の効果があらわれ、「いとけ恐ろしげなる声したる物の怪」が出てくる。寄りましにのり移させ、その正体は何なのかと思いめぐらせる中、貴船の神が姿を現したのであった。「貴船の現れたまへるなりけり」の「なりけり」にはその驚きがみてとれる。周囲の人々は、頼通が妻である隆姫一筋で「あだなるわざ（浮気）」などもなかつたのに、なぜ現れたのかと不思議がる。『栄華物語詳解』が、この箇所を更に具体的に「こは何として、かように尊き貴船の神のたゝり給ふべきぞ、この頼通はかりそめなるいたづらわざもし給ふ事なく、更に覚えぬ事にて、ふしぎなるわざなりとなり」と解するように、【場面①】からは、男が「あだなるわざ」（「かりそめなるいたづらわざ」）を行った際に、貴船の神がたたる、と当時考えられていたことがわかる。

そして、ここに貴船の神が現れたのは、頼通室隆姫の乳母が貴船に祈願したことで、神がその願いに感応したからだ、と理由が明かされる。この部分について、松村博司氏は、「頼通のうわ気の対象となった女が、明神に祈り、頼通を呪詛しようとした時、明神がこれに応じてもののけとなって頼通にとりつき、苦しめたと理解された」「乳母の場合もこれに同じ」と解する。しかし、頼通は降嫁の話を躊躇するほど隆姫との夫婦仲は良く、父道長に「男は妻は一人やは持たる、痴れのさまや。いままで子もなめれば、とてもかうてもただ子をまうけんところ思はめ」（卷十二「たまのむらぎく」②五六頁）と叱責されしむ承諾した降嫁であり、首肯しがたい。「頼通のうわ気の対象となった女」というのは、頼通像と離れていよう。乳母についても、確かにこの乳母は、降嫁話を聞いて「え忍びあえず、くねくねしきことなどうちいふ」（卷十二「たまのむらぎく」②五七頁）人物として描かれているが、乳母が頼通を呪詛すると解することには疑問が残る。もし呪詛するのであれば、女二の宮に対してであるうし、そもそも『栄花物語』本文には、「呪詛」

ではなく、「祈り」とある。乳母の祈りとは、降嫁が中止になりますよといった願いではなからうか。もちろん、倒れた頼通側にとつては、「呪詛」と受け止めるに十分の出来事ではあるが、乳母の側からすればそれは貴船への「祈り」なのである。

周囲の人々の不審の言葉から想像するに、男が「あだ」心を持つと、貴船の神の祟りにあうと信じられていたようだが、この(1)の場面では、隆姫の乳母の貴船への「祈り」をうけて、それに同情した貴船の神が頼通を「わづらはし」てしまった、と描いているのである。

【場面(1)】より少し前の記述になるが、頼通が病に倒れた際、加持祈祷の効果がないのを見て、父道長は、病の原因を陰陽師に占わせていた。その占いでは、「御物の怪や、また畏き神の気や、人の呪詛など」(巻十二「たまのむらぎく」②五八頁)と複数の要因があがっており、この「畏き神の気」が、貴船の神だったわけである。「物の怪(ものけ)」と「神の気(かみのけ)」などの様々な「け」が、頼通を苦しめ、数々の物の怪がよりましたに移る中で、貴船の神が顕現したのだった。

しかも、この貴船の神顕現後、頼通は快復するのではなく、危篤状態に陥る。そこで、頼通の父道長が法華経を読誦すると隆姫の父である具平親王の物の怪があらわれ、道長に対し、頼通への女二の宮(三条天皇女)の降嫁を中止せよと語るのだった。道長は降嫁よりも頼通の命を取り、具平親王(物の怪)の望みを承諾したことで、頼通の病気はあつという間に平癒したと『栄花物語』は描く。頼通の病は、様々な物の怪や、貴船明神までもが影響を与えたが、具平親王の霊が主因だったわけである。<sup>12)</sup>ちなみに『御堂関白記』や『小右記』には、貴船明神の顕現についての記録はなく、『小右記』に「故帥(伊周)霊顕露」と、具平親王ではなく、伊周の霊と書かれている。道長と中関白家(道隆一族)の関係を思えば、伊周の霊と考えられたのは当然だろう。物の怪は複数取り憑くことが多いので、『栄花物語』の記述が必ずしも創作であるとはいえないが、あえてこの差異を意味づければ、具平親王としたのは、父たち(隆姫父具平親王、頼通父道長)の親心を描こうとしたためだろう。そして、貴船の神の登場は、降嫁に悩む妻(隆姫)側の心情に光をあてるためともいえそうである。

次にあげるのは、巻二「後くみの大将」の、男子出産後、産養の最中に体調が急変し、危篤に陥った教通室(公任女)の容体を描く場面である。二例同時にみる。

## 【場面②】

a 「御物の怪人に移しののしる。(中略)。物の怪のいふことなれば、誰もそれをまことと思すべからぬを、貴船のおはするとていみじう恐ろしき事どもあれど、さりともと思すほどに、この殿には、小松の僧都(道隆男隆円)の靈の、この御産屋などの折はいと恐しかりしかど……(中略)。例もつきならひたる女房に小松僧都現れて、「この加持とめよ。点ただひき声を読みひき声を読み」と言へば」(巻二一・後くゐの大將②三八〇～三八一頁)

b ……御物の怪などのことも、傳ふの殿(道綱)の北の方のしわざといひて、貴船のあらはれなどして、今さやうに言ふもかたはらいたく思ざるれば、げにこのごろぞ、後悔のちしき大將とも聞えつべき。(巻二一・後くゐの大將②三八五頁)

a において大騒ぎする物の怪を加持祈祷で調伏しようとしていた際現れたのが、「貴船」の神であった。「物の怪」と思っていたら、「貴船」の神であった、という展開は、【場面①】の頼通の場合と共通する。ただ、貴船の神の顕現は「いみじう恐ろしき事ども」ととらえられる。貴船の神からの言葉はなく、物の怪の一人、小松の僧都が、「この加持とめよ」と言う。出産後たびたび現れていた物の怪だったため、その言葉を鵜呑みにして、加持をとめて経を読んだところ、結局教通室は息絶えてしまう。

b は教通室死後、教通の邸宅を訪問した前相模守孝義の夢語りを、教通らが回想する場面である。物の怪のことも、貴船の神が顕現したのも「傳の殿の北の方のしわざ」であるという夢語りは、決して教通らを慰めるものではなかった。b に教通室を苦しめた人物としてあがった「傳の殿の北の方」の「傳の殿」は、道長の異母兄弟である道綱のことで、その北の方は倫子(道長室)妹とも、道隆女ともいわれている。先に見たように、教通室の死には、小松の僧都(道隆男隆円)が深く関わっているから、後者の道隆女とすれば、これらは中関白家(道隆一族)の怨念の文脈で読むこともできる。ひとまずここでは、貴船の神を招いたのが、【場面①】の頼通の場合と同じく、「女」であるということ、「女」が「女」にたたったこと、物の怪とかわかることをおさえておきたい。

## 【場面③】

さまざまの御物の怪どもいみじうこはし。関白殿わたり、式部卿宮さへ出て、いと恐ろしき事多かる中に、春宮(敦良親王)の御乳母などの、貴船に祈り申したるなどいふことさへ御物の怪申すを、大宮(彰子)いと聞きにくく、かたはらいたく思ざるべし。

(卷二七・ころものたま③七五頁)

後一条天皇と春宮である敦良親王は、彰子出生の一条天皇の皇子である。同母兄弟であるから、「物の怪」の「春宮の御乳母などの、貴船に祈り申したる」という言葉を聞いて、母である大宮(彰子)が聞きづらく決まり悪く思うのも当然であろう。春宮の乳母が何を貴船に祈ったのかは不明だが、後一条天皇と春宮は一才しか違わないので、春宮を早く帝につけたいためとも考えられようか。【場面(1)】頼通の場合、【場面(2)】教通室の場合と比較すると、「物の怪」と同時にあらわれる点、貴船に祈ったのが女という点が共通する。ただ、後一条天皇の場合は「いみじき御慎み」をし、この病(物の怪)で命を落とすことはない。

以上、『栄花物語』のこれらの例からは、貴船の神が、祈雨祈晴の役割だけではなかったこと、「物の怪」と同時に表出し、人を苦しめること、祈るのはすべて女であることがみてとれる。【場面(1)】の頼通の例からは、「あだ(浮気心)」をもった男のもとに崇ると考えられていたこともうかがえるが、【場面(2)】や【場面(3)】は政治と関わる(政敵を恨む)文脈であり、必ずしも浮気した男を呪い殺すというようなものとして働いているわけではない。【場面(1)】でも、そもそも乳母は頼通にたたと考えていなかったようにも思われる。

散文同様、和歌集でも「貴船」はほとんど出てこないが『赤染衛門集』に一例ある。

鞍馬に詣でしに、貴船に幣奉らせしほどに、いと暗うなりしかば、

供とどむかたに見えず鞍馬山貴船の宮に泊まりしぬべし (237)

赤染衛門が鞍馬寺に参詣したときに、貴船社に立ち寄ったときに詠まれた歌である。何を祈願したかは不明だが、「鞍馬に詣でしに」であるので、本来の目的は「鞍馬寺」にあったということになるか。「貴船の宮にとまりしぬべし」からは、暗くなっていなければ、泊まらずに帰ったのに、という思いも読み取れそうである。

それ以外では、今回とりあげる『後拾遺集』雑六の神祇の部に、もう一首「貴船」の神を詠んだものがある。

貴船にまいりて斎垣に書きつけ侍りける 藤原時房

思ふことなる川上にあとたれて貴船は人を渡すなりけり (1177)

詠者の藤原時房は、生没年未詳だが、承保二(1075)年二月二十七日に陽明門院殿上歌合歌人となり、『金葉和歌集』に藤原公実(1053

（1107）との交友を示す一首がある。つまり、『後拾遺集』時代を生きた人である。この1177番歌は、思うことが成就する（成る）という、音高く鳴る川上に現れた（垂迹）貴船の神は、人を渡す船のように、人々を救ってくださるのだなあ、という「社の靈験を讃える歌」<sup>15</sup>である。貴船の神を諸願が成就する神ととらえたものであり、『栄花物語』の貴船の神のような、人を苦しめ、病の際に表出するような負の要素はない。

以上まとめると、貴船は和泉式部の時代、水に関わる神として祈雨祈晴を祈願する神であり、浮気した男に崇る神であり、女の願いを叶える神であり、物の怪と感応し現れるような存在でもあった。また、『後拾遺集』では、男の諸願を成就させ、仏のように衆生を救う靈験あらかたかな神としてとらえられていた。様々な性格を持った神として存在していたことが窺えるが、そもそも貴船社への個人での参詣や祈りは例が少なく、それほど一般的なものではなかったか、もしくは語ることを憚るような神だった可能性もある。

## 三

「物思へば」歌を収載する『後拾遺和歌集』は、応徳三（1086）年、白河天皇の御代、藤原通俊によって編まれた四番目の勅撰和歌集である。全二十卷、春上、春下、夏、秋上、秋下、冬、賀、別、羈旅、哀傷、恋一〜四、雑一〜六の部立からなる。最も多く入集したのが和泉式部（六十八首）で、和泉式部は通俊に最も重んぜられた歌人でもあった。「物思へば」歌が収められている、卷二十・雑六は三部に分けられ、「神祇」「釈教」「俳諧歌」の順で配列されており、「神祇」は、「神祇信仰関係の和歌を集めた部分。後拾遺和歌集において初めて設けられた部立」<sup>17</sup>である。「神祇」に所収された和歌は、1166番歌から1178番歌まで十九首あり、和泉式部の和歌はその三首目にあたる。冒頭の1166番歌は、伊勢大神宮の託宣による天照大神の神詠で、1161番歌は大中臣輔親の返歌、そしてその次に配されたのが、和泉式部の詠んだ「物思へば」詠であった。

参考までに冒頭部の二首を掲出しておく。

長元四年六月十七日に伊勢の齋宮の内宮に参りて侍りけるに、にはかに雨降り風吹きて、齋宮自ら託宣して、祭主輔近を召しておほやけの御事など仰せられけるついでに、たびたび御酒めして、かはらけたまはすとてよませたまへる

さか月にさやけきかげの見えぬれば塵のおそりはあらじとを知れ (1160)

御返りたてまつりける

祭主輔親

おほぢ父ちちむまむまごすけちか三代みよまでにいただきまつるすべらおほん神 (1161)

伊勢大神宮が「神意を信じ、安んぜよ」<sup>16)</sup>と輔親を慰め、輔親が三代に続き神職を得ている喜びと神への礼賛を述べる歌を返している。神から人へ詠みかけ、人が神へ返歌した歌である。そして、次に記されているのが、「物思へば」歌と貴船の神の神詠であった。

今回本稿で配列について掘り下げたことはしないが、備忘録として、今後検討が必要と思われる以下の二点についてかきとめておく。一点目、雑六・神祇の十九首のうち、神と人が歌を交わすのは、この伊勢大神宮と貴船のみである。1160と1161番歌は神から人へ、1162と1163は人から神へと対照的に置かれている。二点目、二節に引いたもう一つの「貴船」を詠む歌である1177番歌は、神祇の部の末尾から数えて二首目におかれている(末尾は春日社)。神祇の部を神社であげてゆくと、伊勢、貴船……貴船、春日という配置になる。伊勢は朝廷(国)にとつて、春日は藤原氏にとつて重要な神であることはいままでもないが、その前後に置いたのが「貴船」なのである。通俊は、和泉式部を重視しただけではなく、「貴船」の神も重視しているように思う。配列に込めた『後拾遺集』撰者通俊の意図が感じられる。

では、改めて、『後拾遺集』「物思へば」歌の詠歌状況、歌意を考察する。再度、和泉式部の和歌を詞書とともに掲出する。

男に忘れて侍りける頃、貴船に参りて、御手洗川みたらしがわに蛍の飛び侍りけるを見てよめる

物思へば沢の蛍もをわが身よりあくがれにけるたまかとぞ見る (1162)

詞書によると、和泉式部が男(夫・恋人)に忘れられていた頃、貴船に参詣して、御手洗川に蛍が飛んでいるのを見て詠んだ和歌である。この「男」については、後世保昌をあてるものも多いが、『後拾遺集』に限っても「橘道貞、式部を忘れて陸奥国に下り侍りければ、式部がもとにかはしたる」(別・491・赤染衛門)との詞書を持つ歌があり、和泉式部を忘れた男は保昌だけではない。また、固有名を明記せず「男」と書くことに關していえば、『後拾遺集』には、「丹後国にて、保昌あす狩せんといひける夜、鹿の鳴くを聞きてよめる」(雑三・969・和泉式部)と名を記す詞書もあるものの、ほとんどは「男」や「女」とあり、それは恋歌の詞書の特徴の一つでもあった。この1162番歌は雑部の和歌ではあるが、詞書で男が誰であるかは秘匿され、恋歌の表現で記している。そして「男に忘

られて」とは、夫なり恋人なりが、女と疎遠になるということである。当時は男が女の元に通う通い婚であるから、忘れられた女は男と会うべきがない。和泉式部には、他に

男に忘れられて、装束つつみて送りはべりけるに、革の帯に結びつけはべりける 和泉式部

泣き流す涙にたへでたえぬればよた縹の帯の心地こそすれ〔後拾遺集〕恋三・757)

という和歌もある。男の装束を返却するというのは、別れの意思表示でもあった。<sup>20)</sup>当時、女は男が三年間通ってこなかった場合、男を待たずに別れを切り出すことが（他の男と婚姻することが）可能だったわけだが、「男に忘れられて」というのは、男の愛情は既に自分がないことを思い知り、絶望するに十分な時間を経ている状態なのである。

「男に忘れられて」和泉式部は貴船に参詣した。男に忘れられた女が何を願ったのか。ここまでみた貴船の靈験と照らし合わせて考えられるのは、浮気した男を呪う（あだ心に崇る）、相手の女を呪う、男の愛情の回復を祈る（諸願成就）になるうか。様々に読む者の想像力をかきたてる。

参詣後、和歌を詠む契機となったのは、御手洗川の上を飛ぶ螢である。御手洗川は、賀茂社の「御手洗川」をさすことも多いが、こは貴船の御手洗川である。御手洗川は、神社のそばを流れる、手を洗い口をそそぎ身を清める川のことをいう。清めの川の上を飛ぶ螢を見て、和泉式部は「物思へば」の和歌を詠んだのだった。

和歌の大意は、「(恋の)物思いをしていると、(御手洗川の)沢の螢火を我が身から離れ出ってしまった魂かと思ふことです」となるが、この歌は、男を呪うものでも、男の愛情の回復を願うものでもどちらでもない。螢が飛ぶのを見て、我が身から離れ出る自己の魂かと思ふ、自己を見る和歌なのである。独詠（ひとりごと）ともとれるし、神に自己の思いを伝えた歌ともとれる。

和泉式部は、物思いがゆえに、沢に飛ぶ螢を我が身から「あくがれにける魂」として見た。身から遊離する魂を見つめる和泉式部の姿。物思いのせいで魂が遊離するという発想は、平安期の文学作品に見える。その表現史については、高橋文二氏や藤原克巳氏による詳細な検討があるが、<sup>22)</sup>ここでも同時代の作品を中心に確認しておく。

まずは、『伊勢物語』一一〇段をひく。

昔男、みそかに通ふ女ありけり。それがもとより、「今宵、夢になむ見えたまひつる」といへりければ、男、

思ひあまりいでにし魂のあるならん夜ぶかく見えは魂結びせよ（『伊勢物語』一一〇段）

女が「あなたの夢を見ました」と言うのを男が聞いて、「あなたを思う余り私から抜け出た魂があるのでしよう。また見えたならば魂結びのまじないをしてください」と、魂が遊離しないように願ってほしいと詠む。『源氏物語』葵巻の、

（物の怪）「……かく参り来むともさらに思はぬを、物思ふ人の魂は、げに、あくがるものになむありける」となつかしげに言ひて、

なげきわび空に乱るるわが魂を結びとどめよしたがひのつま（葵巻②四十頁）

も同様である。葵上に取り憑いた物の怪が、「物思ふ人の魂は、げに、あくがるもの」は和泉式部と、「わが魂を結びとどめよ」と魂結びを乞うのは、『伊勢物語』と同じである。同時に、物の怪として葵上に取り憑いたと噂される六条御息所も、「げに身を捨ててや往にけむとうつし心ならずおほえたまふをりをりもあれば」と、魂が我が身を捨てて離れ出たような感覚を自覚する。浮舟巻には、『伊勢物語』同様、「かくのみものを思ほせば、もの思ふ人の魂はあくがるものなれば、夢も騒がしきならむかし」（⑥一九六頁）と、浮舟があまりにも物思いをしたがために、離れ出て、母親の中將の君の夢に出たとも語られる。和泉式部自身も「もの思へば」歌以外に、「人はいさわが魂ははかもなき宵の夢路にあくがれにけり」（『和泉式部続集』406）という「魂が夢路に遊離してしまう」歌を詠んでいる。恋する者が、物思いで悩むと、その魂は身から「あくがれ」さまようのである。さまよい出る先は、恋しい人だったり、男を奪った女のもどったり、恋しい母だったりする。

そんな中、「もの思へば」の歌において、和泉式部が「あくがれにける魂」として見たのは「螢」だった。そこで、「螢」がどのような枕詞として使用される一例のみで、『日本書紀』に、「彼の地に 多に螢火の光く神 及び蠅声す邪しき神あり」（卷二 神代下）の混沌とした葦原の中つ国の禍々しい不気味なものとしてあげられる。歌語として景物として定着するのは、平安期以降であった。例えば、次のように、

あけたてば蟬のおりはへ泣きくらし夜は螢の燃えこそわたれ（『古今集』恋一・543）

夕されば螢よりけに燃ゆれども光見ねばや人のつれなき（『古今集』恋二・562）

夏の夜はともす螢の胸の火ををしもたえたるたまと見るかな（『古今六帖』螢・つらゆき・4012）

昼はなき夜は燃えてぞながらふる螢も蟬も我が身なりけり（『古今六帖』螢・つらゆき・4015）

鳴く（泣く）蟬と対照的に、「夜」燃える虫としてとらえられ、「私は夕方になると、恋の思いで螢よりも燃えている」といったような男の身を焦がす燃える恋の思いを重ねる歌が詠まれるようになる。燃える螢は「胸の火」をともし、「たま（魂）」にたとえられる。

物語の素材としてもよく取り上げられ、『伊勢物語』では「ゆく螢雲の上までいぬべくは秋風吹くと雁につげこせ」（四十五段）と、夏から秋への季節の推移、亡き女へのメッセージを託す手段として「螢」が用いられていた。また、

……天の下の色好み、源の至といふ人、これももの見るに、この車を女車と見て、寄り来てとかくなまめくあひだに、かの至、螢をとりて、女の車に入れたりけるを、車なりける人、この螢のともす火にや見ゆらん、ともし消ちなむずるとて……（『伊勢物語』三十九段）

と、葬送の中にあつて女の顔を見ようとす照明として螢火が用いられている。螢火を照明として用いる発想は、『晋書』車胤・孫康のいわゆる螢雪の故事をもととするが、他にも『うつほ物語』では書物を、『源氏物語』螢巻では女性の姿を見るために用いるなど散見される。螢火に照らし出された玉鬘の姿を垣間見た後、兵部卿宮は、玉鬘に「鳴く声も聞えぬ虫のおもひだに人の消つには消ゆるものかは」と詠みかけており、「鳴く声も聞えぬ虫のおもひ」つまり、螢火を消そうと思つても消えないように、あなたへの「思ひ」の「火」は消えないと玉鬘への恋心を訴えている。

このように、王朝文学の中で「螢」は、その光で書物や女を見る灯りとして用いたり、一人で身を焦がすようにして相手を恋う心を託す素材として類型化されていた。「螢火」を魂に見立てるものもあるが、部立からもみてとれるように、基本的に螢火に身をこがすのは男であった。

発想としてなかったわけではないが、「物思へば沢の螢をわが身よりあくがれにけるたまかとぞ見る」と、「螢」を女が詠むこと、「螢」を遊離する自己の「魂」と見立てることが、松井氏をはじめ従来指摘されてきたように、王朝和歌の類型からはずれる特殊なものであるのは間違いないだろう。<sup>23</sup> 螢火が川の上を浮遊しているように、和泉式部は自らの魂が御手洗川の上を浮遊しているという感覚に陥る。「御手洗川」という清めの川は、和泉の身も心も浄化するものではなかった。遊離魂は、自分が思う（憎む）相手の所に向かうのが常

だが、和泉式部の魂はどうであろうか。『後拾遺集』を読む限り、まだ眼前にある。葵上を苦しめた物の怪は「空に乱るる」と詠んだが、和泉式部の魂はここ、貴船の御手洗川（沢）の上にあるのである。遊離する魂は、このあと自分を忘れた男の元にゆくのか、男を奪った女の元にゆくのか、それともここにとどまるのか……。そもそもこの蛸は私の魂なのか。いずれともしれず、いずれの可能性も秘めているのが、この「物思へば」歌といえようか。貴船の神がなぜ和歌を詠んだかについては、次節で検討してゆく。

#### 四

和泉式部の和歌に神は「返し」をする。

御返し

奥山にたぎりておつる滝つ瀬のたまちるばかり物な思ひそ（1163）

この歌は貴船の明神の御返しなり。男の声にて和泉式部が耳に聞えけるとなんいひ伝へたる

和泉式部の和歌の「御返し」として、「貴船の明神」が詠んだ和歌だと左注は説く。「御返し」とあっても、和泉式部の歌が贈歌であるということにはならないが、貴船の明神が、和泉式部の和歌に感応して詠んだ和歌としてあるのは確かである。そもそもこの歌がなければ、「神祇」に「物思へば」歌が掲載されることもなかったであろう。和泉式部の歌の何に感応し、貴船の神は和歌を詠んだのであろうか。

神祇歌の特性について、阿部泰郎氏は、「神祇歌には二つの側面がある。一方では、神にたいして人が呼びかける、祈りの歌、つまり神祇への問いかけであり、神徳を讃え神社に奉納する歌である。もう一方は、神から人へもたらされる歌である。それは歌による神の告げであり、託宣の歌すなわち神詠である」としたうえで、中古の神祇歌には、截然とした区別はなく、この和泉式部と貴船明神の贈答のように、「人と神との親しい交流が、その二つの面を繋いでいる」という<sup>25</sup>。和泉式部の態度、歌に神への親しさまで読み取ることはできないが、和泉の歌は神への問いかけや祈りを述べたものではないし、貴船の神が「男」の声で伝えたところにも、和泉式部への親和性は看取される。

従来、和泉式部の「物思へば」歌ほどに、貴船明神の「奥山に」歌および詞書・左注については検討されてこなかったことに関して、松井氏が、「この返歌を黙殺すべきではない。二首の関係を考えるならば「沢の螢」歌（物思へば）歌のこと（稿者注）享受にとつて「たぎつ瀬」歌の考察は不可避<sup>20</sup>」といわれた言葉にもよくあらわれている。それでも管見の限り、この提言以降も貴船の神詠ではなく和泉式部詠に関して焦点をあてた論考が重ねられてきた。それほどに「物思へば」歌が異質で、人々をひきつける力を持っているともいえるが、『後拾遺集』に貴船の神の歌を載せている以上、貴船の神が和泉式部の歌を、思いをどのように受けとめたのか検討しなければ、『後拾遺集』が描いた和泉式部の思いは読み取れないのではなからうか。

貴船明神は、和泉式部に対して「奥山でわかえり落ちる激流によって飛び散る玉ではないが、魂が砕け散るほどの物思いをなさるなよ」と詠んだ。諸注を通覧すると和泉式部を慰める歌と解するものがほとんどであるが、「事態は好転するからひどく思い悩むなど慰めた神詠<sup>27</sup>」と慰撫する内容まで踏み込んだものもある。ただし、「事態」の「好転」がどのような状態をいうのかまでは指摘していない。和歌の詠みぶりを見ると、「奥山」は貴船の地をさし、「たぎりて落つる滝つ瀬」とは、貴船神社近くを流れる貴船川の急流をイメージさせ、「玉散る（魂散る）」の序詞とする。また、和泉「物思へば」神「物な思ひそ」、和泉「たまかとぞ見る」神「たま散るばかり」と歌の言葉に丁寧に応じながら返している。前引の二〇〇番歌と二〇六番歌が「言葉」の上で全く照応していないと対照的でもある。そして、丁寧に戻しているからこそ、和泉式部の歌の「螢」という言葉が貴船の神詠にはないことが浮かび上がってはしないだろうか。

螢ではなく、代わりに呼び込まれたのは、「滝つ瀬」であった。和泉式部が、自分の魂を螢火にたとえたのに対し、貴船の神は、螢火ではなく、奥山の激流で飛び散る水滴に置き換えているのである。

ここで、改めて王朝和歌の「螢」が、伝統的イメージとして、思い焦がれ、燃える恋情のイメージを持つことが思い起こされる。和泉式部の「物思へば」の歌の螢は、自身の魂を見立てるものではあるが、それは「物思ひ」の結果、もたらされたものであった。恋の思いは、「火」と通じ、螢と同じように燃えるものとしてとらえられる。「時過ぎてかれゆく小野の浅茅にはいまは思ひぞ絶えずもえける」〔『古今集』恋五・790〕で、男の夜離れがあってもなお「思ひ」の火を「絶えず」燃やしている女の恋情が詠まれているように、「男に忘れられて」なお男を忘れることができないう和泉式部は、その物思いを止むことを祈って貴船に参詣したのではなかったか。

『古今集』は、700番歌の次に「冬枯れの野辺と我が身を思ひせばもえてもはるを待たましものを」（恋五・791）という野火を燃え（萌え）あがらせる恋情を詠んだ歌を配した後、「水の泡の消えでうき身といひながらながれてなほも頼まるかな」（恋五・792）、「水無瀬川ありて行く水なくはこそ」（恋五・793）、「吉野川よしや人こそつらからめ」（恋五・793）と火の和歌の続きに水の歌を置いており、火と水の対比が配列から読み取れる。『後拾遺集』の和泉式部と貴船の神のやりとりも火と水を対する手法が採られているのである。

和泉式部が参詣したのは、自分を忘れた男への「思ひ」の火を消すためであり、それが「貴船」であったのは、貴船が水神だったことを契機としているようにも思うのである。「恋せじと御手洗川にせし禊ぎ神はうけずぞなりにけらしも」（『古今集』恋一・501、「伊勢物語」六五段）の歌では、「もう恋はしまい」と神に願っても神が受けてくれず男は恋に落ちてしまったが、和泉式部は男へのどうしようもない熱い「思ひ」の火を鎮火すべく、水神である貴船に参詣したと考えられるのである。その思いを受け止めたからこそ、貴船の神は、「奥山にたぎりて落つる滝つ瀬の」と激流を序として和歌を詠んだのではないか。

最後に左注について考えたい。1162番歌と1163番歌が「神祇」に入るのは、この左注に「貴船の明神」と書かれたことに支えられている。「明神」は「名神」でもあり、靈験あらたかな神への敬称である。『後拾遺集』の神は『栄花物語』のように人を苦しめるものとしては位置づけられていない。物思いのあまり、蛍さえも自己の魂と見失ってしまう和泉式部の惑乱に寄り添い、導く神として描かれている。神は「男の声」で、和泉の耳に和歌をささやく。この「男」は、貴船の神が神の声ではなく「男の声」を装って和泉に語りかけたということである。その「男」とは、「男に忘れられて」の「男」の声であろう。なぜ、「男の声」に仮託したのか。それは、和泉式部の魂を流離させないためではなからうか。遊離した魂が、都の男の元へ、もしくは女の元へ彷徨う前に、貴船に「男」を呼び込むことで、魂を受け止めようとしたのである。この貴船の神詠を、神の夢告としてとらえる解釈もあるが、たとえ実際にはそうであったとしても、この左注に「夢」と語られない所に意味がある。暗闇の中、貴船の御手洗川の蛍を見ながら、自己の魂が遊離する和泉式部の惑乱の様が、「男」に成り代わることで恋の贈答に装いながら、「神」として導こうとした貴船の神の姿が、浮かびあがってくるのではなからうか。

『後拾遺集』は、和泉式部の「物の思へば」歌を貴船の神詠と対にすることで、和泉式部の蛍火のように身をこがすばかりの思いを、沢の蛍を自己の遊離する魂とみる心情を、貴船の神が鎮めるものとして描こうとしたのである。それは、貴船の靈験著しいことを示す

のみではなく、和泉の「もの思ひ」が、霊験を必要とするほど深刻な状況であったことを改めて印象づける。貴船の神詠がなければ、和泉は「もの思ひ」のはてに命を落としていたかもしれない。<sup>30)</sup> 神を必要とした和泉の惑乱が看取される。

※以上、『伊勢物語』『源氏物語』『栄花物語』本文引用は、新編日本古典文学全集（小学館）、和歌引用は、日本文学web図書館所収、新編国歌大観・私家集大成による。便宜上、表記の変更や（ ）内に注を施すなど私に改めた部分もある。

## 注

- (1) 『和泉式部集』Ⅲ(125)、『同』Ⅳ(308)は掲載するが、これら二本は、勅撰集所収歌を主として編纂されたものである。
- (2) この説話は、『無名草子』『古本説話集』『世継物語』『十訓抄』『古今著聞集』『沙石集』『俊頼髓脳』『歌枕名寄』『和歌童蒙抄』『袋草紙』『保安二年九月十二日関白内大臣歌合』(六番 39・40 判詞)などに取載され、中古から中世まで二〇〇年にわたり、当該歌は受容されてきた。
- (3) 遊離魂に関しては、高橋文二「あくがるる心」と鎮魂——古代文学研究の一つの視座——(坂本信幸・寺川真知夫・丸山顯徳編『論集 古代の歌と説話』和泉書院 一九九〇年十一月)、同「物語の視座——あくがるる心」のうちの自己救済——(『物語鎮魂論』おうふう 一九九〇年)、西郷信綱「夢殿」(『古代人と夢』平凡社ライブラリー 一九九三年六月)、藤原克巳「平安朝文学史の試み——あくがるる心」をめぐって——(秋山虔編『平安朝文学史論考』武蔵野書院 二〇〇九年十二月)、藤原克巳「あくがる」再考——野分巻鑑賞のために——(『むらさき』50号 二〇一三年)、今井上「平安朝の遊離魂現象と『源氏物語』—葵巻の虚と実—」(『源氏物語』表現の理路)笠間書院 二〇〇八年)、藤井由紀子「『源氏物語』の靈魂卷」(『異貌の『源氏物語』』武蔵野書院 二〇二二年五月)、和泉式部の「物思へば」歌および蛭に関しては、松井健児「和泉式部歌「沢の螢」考」(『野州国文学』26号 一九八〇年十二月)、渡辺秀夫「螢」(『詩歌の森 日本語のイメージ』大修館書店 一九九五年五月)、小柴良子「和泉式部「物思へば」の歌の「ほたる」と「魂」について——周辺の螢を見ながら——」(『清心語文』第7号 二〇〇五年七月)、長谷川範彰「和泉式部「もの思へば」」歌覚書(『日本文学論叢』6号 二〇〇六年八月)などに詳しい。
- (4) 上村悦子「和泉式部の歌」(『和泉式部の歌入門』笠間書院 一九九四年十月)
- (5) 新大系脚注。
- (6) 実川恵子「後拾遺和歌集」女性歌人増大の意味するもの」(『後拾遺和歌集 新風と「をかしき風躰」』(武蔵野書院 二〇二〇年三月)
- (7) 藤原克巳「神」(秋山虔編『王朝語辞典』東京大学出版会)
- (8) 貴船の神は、『竹取物語』『落窪物語』『うつつほ物語』『源氏物語』『狭衣物語』『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『土佐日記』『蜻蛉日記』『和泉式

部日記』『紫式部日記』『更級日記』『枕草子』に登場しない。

(9) 『枕草子』「近うて遠きもの」に「鞍馬のつづらをりといふ道」(新全集・一六〇段)がある。これは清少納言の鞍馬についての感慨だが、貴船も近いイメージだったと思われる。

(10) 和田英松・佐藤球『源氏物語詳解』(明治書院)。

(11) 松村博司『栄花物語全注釈』(角川書店) 補説。

(12) 貴船の神が去ることで、具平親王の力が強く出たといえるかもしれない。

(13) 注(10)同書補説に詳しい。

(14) 注(10)に同じ。

(15) 『後拾遺和歌集』(新日本古典文学大系・岩波書店) 脚注。

(16) 勅撰集では、『千載和歌集』に貴船の神を詠む歌が二首ある。「貴布禰の社にまうでて柱に書き付け侍りける 今までになど沈むらむ貴舟川かばかり早き神を頼むに かくてのちなんほどなく蔵人になり侍りにける、近衛院の御時なり」(平実重・神祇歌・1270)、「同社」(賀茂社)の後番の歌合の時、月の歌とてよめる 貴舟川たま散る瀬々の岩波に氷をくだく秋の夜の月」(皇太后宮大夫俊成・神祇歌・1274)。1270番歌は諸願成就を願ひ、詠み、効験によって蔵人になっている。1274番歌は、『後拾遺集』1183番歌の貴船の神の歌を本歌とした歌である。詞書からも窺えるように、この時すでに貴船は賀茂社の末社になっていた。

(17) 注(15)同書、「神祇」脚注。

(18) 注(15)同書1161番歌脚注。

(19) 勅撰和歌集の「神祇部」については、深津睦夫「勅撰和歌集神祇部に関する覚え書き」(『皇學館大学神道研究書紀要』64-7、二〇一五年)、水尻成美「勅撰和歌集における部立「神祇部」について」(『皇學館論叢』532、二〇一九年四月)があり、水尻論文には、神祇歌巻頭歌や、神社別再録歌が掲載されている。

(20) 倉田実「女が男に物を返す時」(『王朝の恋と別れ 言葉と物の情愛表現』森話社 二〇一四年十一月)に詳しい。

(21) 福島尚「後拾遺集一一六二番和泉式部詠歌の本文異同と受容」(『高知大國文』40号 二〇〇九年十二月)でも指摘されているように、諸注釈が底本とする『後拾遺集』は「あくがれ出づる」ではなく、「あくがれにける」である。紙幅の関係上深入りはしないが、「にける」であれば、魂が離れてしまったことを客観的に眺める意が強くなり、「出づる」であれば、今まさに魂が抜け出てゆくような感覚を表すといえようか。

(22) 注(3)松井、藤原論文。

(23) 注(3)松井論文、小柴論文、長谷川論文参照。蛩を魂と見た歌に、「思ひあまり恋しき君が魂とかける蛩をよそへてぞ見る」(『高遠集』286)

『後拾遺和歌集』和泉式部「物思へば」歌と貴船の神詠

がある。高遠の方が年長ではあるが、和泉式部とどちらが先行するかは不明である。高遠の方が先であったとしても、白居易「長恨歌」の「夕殿螢飛思悄然 秋灯挑尽未能眠」を下敷きに相手の魂を螢によそえた高遠の歌と、自己の魂を螢火に見る和泉式部の歌はかなり違っている。また、『伊勢物語』四十五段の「螢」も、亡き女の魂と重なりもするが、發送として通ずる所はあっても、表向きは雁への使者であり、明確に見立てたものではない。

(24) 吉井祥「和す」ということ——古代において返歌はいかに記されたか(『和歌文学研究』第一二〇号 二〇二〇年六月)は、「従来、「返し」と付くと反射的に「贈答歌」と理解されていた。しかし、実際には、「返し」は様々な歌の付き方を包括するものであった」と、「返し」が贈答歌であることを保証するものではないことを指摘する。

(25) 阿部泰郎「慈円と神祇歌—日吉山王詠と神詠をめぐりて」(『赤羽淑先生退職記念論集』ノートルダム清心女子大学 二〇〇五年三月)

(26) 注(3)松井論文。

(27) 注(15)同書。二〇番歌脚注。「和泉の心を慰撫する貴船の神」(川村晃生校注『後拾遺和歌集』和泉書院 一九九一年三月)二〇番歌頭注。

(28) 『源氏物語』手習巻の「……いとさよげなる男の寄り来て、いざたまへ、おのがもとへ、と言ひて、抱く心地のせしを、宮と聞こえし人のしたまふとおほえしほどより心地まどひにけるなめり、知らぬ所に据ゑおきて、この男は消え失せぬと見しを……」(⑥二九六頁)と、浮舟が「いとさよげなる男」(物の怪、霊)を「宮(匂宮)」と錯覚したことも想起される。

(29) 注(3)西郷論文。松井健児氏もこれに賛同する。

(30) 注(3)藤井論文も和泉式部の「死に近づいていく自分の身体が意識された」歌と解する。